

つくり
育てる漁業
人と技術の
ネットワーク

ACN REPORT

特定
非営利
活動法人

ACNレポート
第49号

2018年9月30日発行
(毎年2回1月・9月発行)

編集/NPO法人ACN事務局
発行人/田嶋猛(NPO法人ACN代表)
発行所/NPO法人アQUALチャーネットワーク
〒833-0056 福岡県筑後市久富1343番地
ACN事務局/クロレラ工業株式会社
生産本部 技術特販部内
TEL.0942-52-1261
FAX.0942-51-7203

NO.49 2018.SEP.
AQUACULTURE NETWORK

1. 第29回ACNフォーラムのご案内

NPO法人 ACN

2. ACN養殖用種苗生産速報

NPO法人 ACN

3. 養殖・販売概況

NPO法人 ACN

4. 新入社員紹介

株式会社 ユーエスシー・太平洋貿易株式会社

5. ACN海外レポート

九州・水生生物研究所 稲田 善和

第29回 ACNフォーラムのご案内

ACNフォーラムは、産学官の増養殖関係者のご支援により、この度29回目を迎えることになりました。イベント主催者の常と思いますが、ACNフォーラムが近づいてくると天気予報、特に台風の進路予報にとっても敏感になります。とりわけ、本年の開催地は鹿児島市ということもあり例年以上に気を揉んでいました。ところが、それを見透かしたかのように、7月末の台風12号は、東海地方から九州へと逆走し、8月になると日本各地で気温は40℃を超え、12日からは5日連続、5個の台風が発生して、日本付近に3つの台風進路図が記載されていました。気象庁発表の「50年に一度」、「統計開始後では初めて」を「普通」と感じてしまう「異常」気象のこの頃です。

NPO法人ACN会員一同は、皆様のご参加を会場にてお待ちしております。

2018年9月吉日

NPO法人ACN 会員一同

■開催日時：2018年10月16日(火) 13:00~17:00

■開催場所：ホテルマイステイズ鹿児島天文館 TEL:099-224-3211
〒892-0844 鹿児島市山之口町2-7

講演1 「ブリ養殖生産と販売・輸出等を取り巻く環境について」

日本水産株式会社中央研究所 大分海洋研究センター
主任研究員 原 隆 様

講演2 「魚類仔魚は本当はどの餌がお好き？」
—感覚に訴える餌とは～マグロ類などを通して—

鹿児島大学水産学部水産学科 准教授 小谷 知也 様

講演3 「緑色LED光によるカレイ・ヒラメの成長促進」

北里大学海洋生命科学部 教授 高橋 明義 様

■視察日時：2018年10月17日(水) 10:30~12:00

■視察場所：(公財)かごしま豊かな海づくり協会 TEL:0994-32-5604
鹿児島県垂水市柊原3551

問合せ先：太平洋貿易株式会社 (担当:和田・轟木)

TEL(092)283-5003 FAX(092)283-5004 ptc@pacific-trading.co.jp

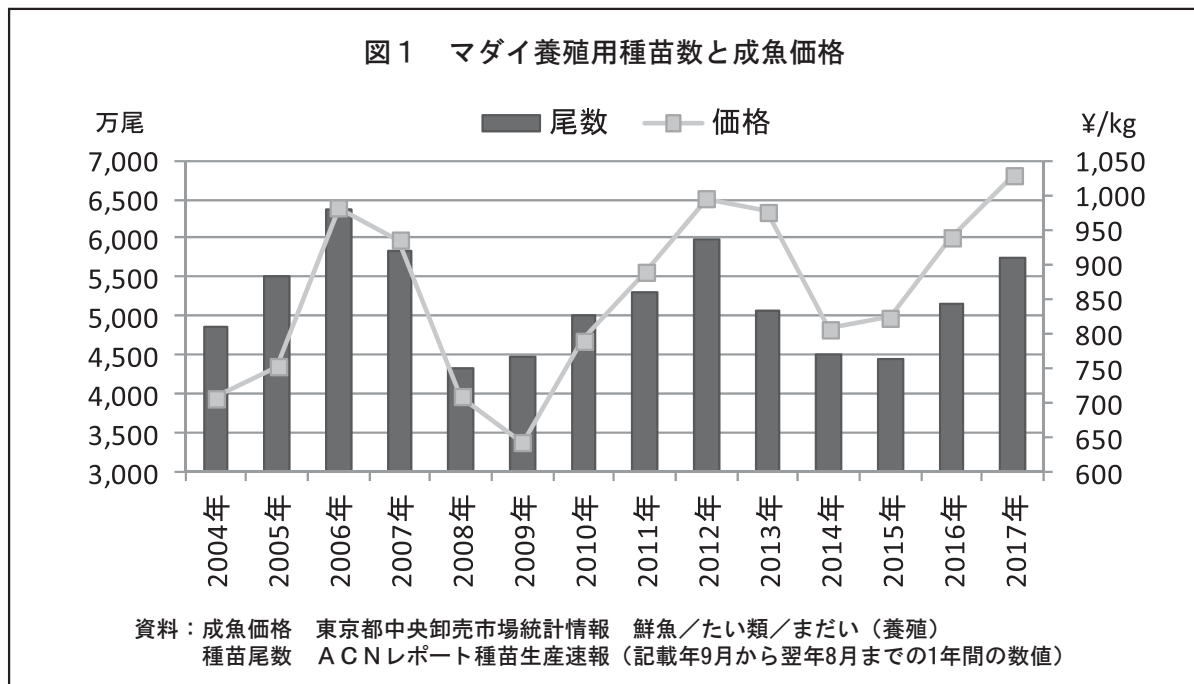
1. マダイ 真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛

養殖用種苗数5,761万尾(昨年5,169万尾比 11.4%増)

2017年9月～2018年8月のマダイ養殖用種苗数は、山崎技研、近畿大学、ヨンキュウなど17社(民間16社、公的1事業場)で5,761万尾となり、前年に引き続き10%以上の増加となった。種苗の販売価格は前年同様全長10cm前後を主体に9～10円/cmであった。2018年の夏越し種苗数は860万尾で、前年664万尾比29.5%増となった。マダイ成魚の不足傾向が続いたこと、成魚相場が高値安定で推移したことで、マダイ養殖業者の導入意欲が高まっており、2015年の種苗数4,443尾から2年間で1,300万尾、30%の増加となった。図1に示したように、2004年以降で、種苗数が5,500万尾を

越えた年の翌々年には、成魚価格の大幅下落が繰り返されており、今シーズンの種苗数がこれに匹敵するレベルになっている。来シーズンの種苗数が同様に高いレベルであった場合、その後の成魚相場動向に大きな影響を及ぼすことが危惧される。

マダイ種苗の生産過程において、幾つかの沖出し漁場で微胞子虫による感染被害の増加が確認された。ブリ類ではべこ病と言われ、以前より問題となっていたが、マダイについての感染報告は、これまでもあったものの症状は軽微であり、問題になることはなかった。マダイでの微胞子虫による被害が拡大しないことが望まれるが、稚魚期における新たな感染症として注視していく必要があると思われる。



2. トラフグ 虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚

養殖用種苗数639万尾(昨年809万尾比 21.0%減)

2017年9月～2018年8月のトラフグ養殖用種苗数は、長崎種苗、大島水産種苗、バイオ愛媛など16社(民間13社、公的3事業場)で639万尾となり、2015年(880万尾)から2年連続で減少した。

2017年9月の成魚浜値(生産者価格)は800gサイズ2,500円/kg、キロUP 2,700～2,800円/kgと低調であった。そのため、採卵時期の12月になっても養殖業者からの引き合いは弱く、今シーズンの稚魚導入を止める養殖業者も散見された。このように、シーズンを通して弱含みな声が支配するようになり、状

況の確認のため12月採卵を1月に延期する種苗生産者もあった。この様な状況に対処するために、種苗生産者は種苗生産ラウンド数を減らし、中間魚生産規模の縮小、自家養殖の廃止等で経費抑制の生産体制を採った。

採卵用親魚は養殖場からの高成長選抜個体が主流で、年末より準備に入り各社2月中旬までには池入れを完了した。生産面では、変形魚の発生や大量斃死の報告はなく、順調なシーズンであったと思われる。例年3月中旬から出荷される早期種苗は、加温施設のある陸上養殖場へ昨年よりやや遅れて出荷された模様である。また、シュードカリグス・フグ寄生前に

池入れをしていた海面養殖業者も、今シーズンは成魚の荷動きが悪いため、生簀が空かず導入が遅れた。

販売価格は、配合飼料の値上げ等もあり、若干値上げの情報もあって、全長6cm UP、95～107円/尾、7.5cm UP、110～117円/尾で推移したようである。また、出荷前の歯切り費用は10～13円/尾であった。

生産技術面では全雄種苗が3社で生産された。成魚の成績としては、海面養殖の年内出荷分（17ヶ月飼育）では、1.2～1.3kg/尾UPで白子入り率70%や、年明け出荷分では、1.6kg/尾のトビ（高成長）や白子入り率100%も確認されるなど、養殖業者の評価も上々のようである。

3. ヒラメ 平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目

養殖用種苗数510万尾（昨年533万尾比 4.3%減）

2017年9月～2018年8月の養殖用種苗数は、まる阿水産、長崎種苗、マリンテックなど12社（民間10社・公的2事業場）で、前年比4.3%減の510万尾となった。

本レポート1月号では、堅調なヒラメ相場を反映して、前年比50万尾増の580万尾と予想していた。しかしながら、大分県の陸上養殖場では、トラフグ成魚価格の低迷で出荷が捗らず、ヒラメ種苗用イセスが確保できなかったことや、昨今のヒラメ種苗生産者

は、受注が未確定な見込み生産をしなくなっていることなどで、今シーズンはヒラメ種苗の需要に供給が間に合わなかった模様である。今後も、成魚相場は高値推移と予想されるが、種苗生産尾数については伸長要素が少ないことから、養殖場への導入数増加は期待できないものと予想される。種苗の販売価格は前年同様で全長8cmUPで90円/尾であった。

生産面では、前年発生したアクアレオウイルス症の発生もなく、全般的に斃死等による大きなトラブルはなく、順調に推移した模様である。

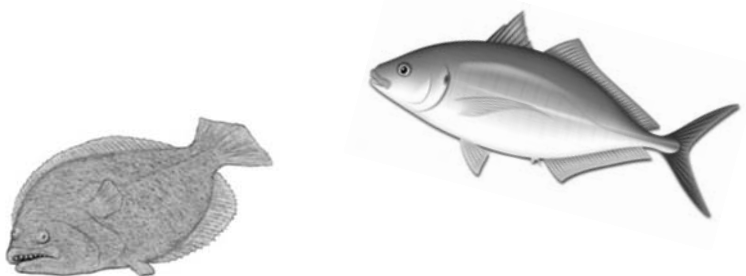
4. シマアジ 縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆

養殖用種苗数340万尾（昨年370万尾比 8.1%減）

2017年9月～2018年8月のシマアジ養殖用種苗数は、近畿大学、山崎技研など5社（民間4社・公的1事業場）で340万尾と、前年比8.1%減少した。販売価格は、前年同様に全長9～10cm、170円/尾が主体であったが、

少量ながら同サイズで150円/尾もあった。導入尾数の減少の要因として、相場が好調なマダイの種苗導入に戻る業者が増えてきていることが挙げられる。来シーズンも好調なマダイ相場が予想されるため、シマアジ種苗の導入数は350万尾前後で落ち着くものと思われる。

文中社名敬称略



1. マダイ 真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛

マダイ成魚の品薄（特に大サイズ）状態が続き、2017年末相場でも900円/kg程度を維持し、2018年春先に一旦値を下げたものの、5月以降再び相場は上昇した。7月には一時1,150円/kgにまで上昇し、9月現在でも1,000円/kg前後を維持している状況であり、この後も大きな下落は起きそうにない。自然災害による供給難も相場動向に一時影響したようである。赤潮発生により一部で斃死被害が出ている中、7月の豪雨災害が発生し、四国・瀬戸内方面において、泥水の流入・水潮が起きたことによる斃死被害や餌止めの影響は大きかった。本年は、台風発生も多く自然災害による影響が懸念されるが、それ以外の悪化要素は少なく、全体的なマダイの育成に関しては概ね順調に進んでいると見られる。成魚相場が安定していることから、マダイ養殖の意欲は高い状態にある。

国内のマダイ在池に影響する韓国向け輸出は、価格上昇及び品薄感があるにも関わらず、2018年上半

期実績は直近5年間では数量・金額ともに最大となっている（表1参照）。また、この輸出増の一因として、中国産ハタ類輸入の帰り船で再輸出されているとの情報や推測がある。ただし、価格が1,000円/kgを超えた6月及び7月では輸出数量が減少している。今後も高値で推移すると推測されるため、8月以降も輸出数量は低迷することも考えられる。今期のマダイ種苗数の多さが2年後の相場に影響を与えるという不安を考えると、韓国市場の縮小は望ましくない。2020年は東京五輪の年であり、在池量と相場の関係性を変化させることも考えられ、相場予想は難しいが、当面はこれからの1年間の動向に留意したい。

疾病状況は、例年の様にエドワジェラ・タルダ症による慢性的な被害が出ている。イリドウィルス症の被害も見られるが、ワクチン接種比率が上昇している他、ビタミン類の投与強化など各養殖場で対策が講じられており、効果が期待される場所である。

表1 韓国向けマダイ輸出動向（半期毎数量と平均価格）

	2014年		2015年		2016年		2017年		2018年
	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期
輸出量(t)	655	1,214	1,082	921	1,216	1,279	1,222	942	1,624
平均価格(円/kg)	732	691	696	861	843	841	865	964	989

図1は、東京都中央卸売市場（全市場）における養殖マダイ鮮魚の取扱い累計数量と月別価格(消費税込)について、直近データの2018年7月を基準に、3年分を示したものである。2017年8月～2018年7月の年間

取扱量は4,373トンであり、前年同期は5,444トン、前々年は6,157トンと、2年連続減少している。価格は上昇傾向である。

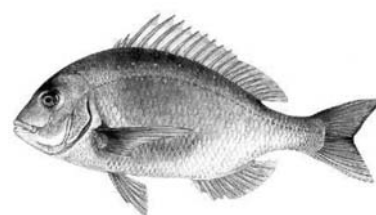
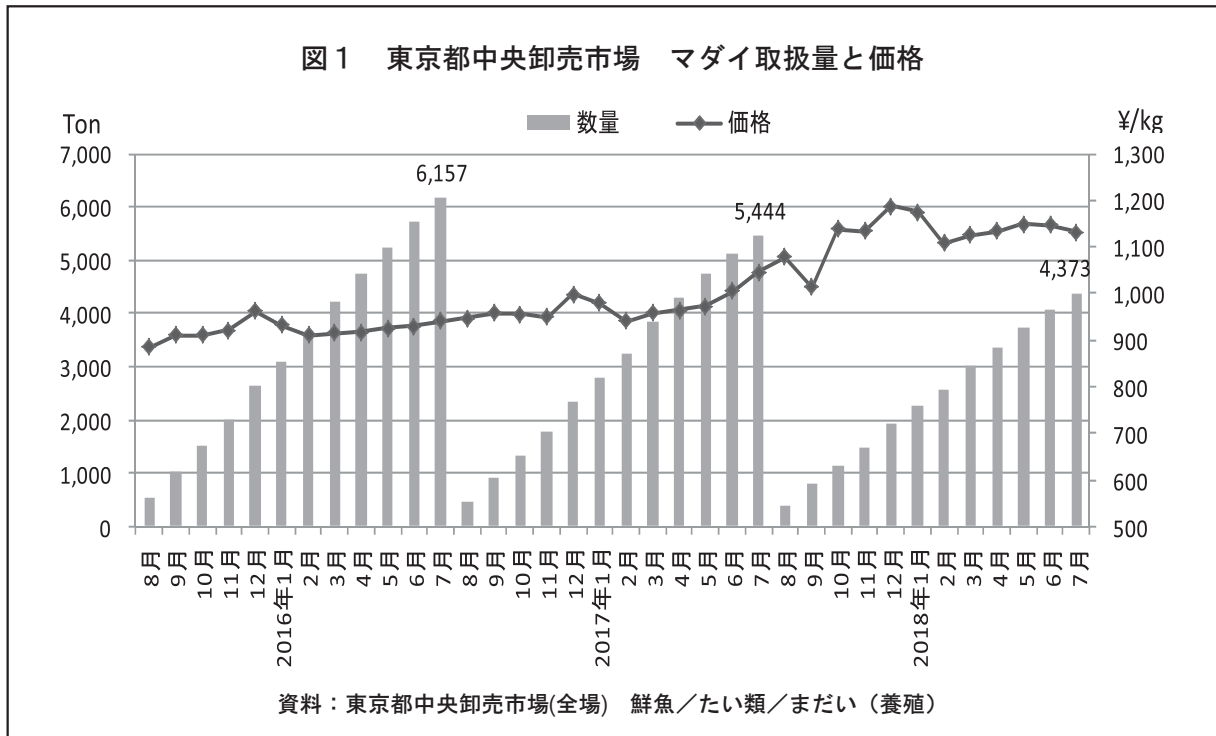


図1 東京都中央卸売市場 マダイ取扱量と価格



2. トラフグ 虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚

2016年9月以降トラフグ相場は回復することなく出荷も停滞し、2017年4月末には、浜値(生産者価格)が海面物1,500円~1,600円/kg、陸上物1,700~1,800円/kgまで下落した。この時期に出荷された国産物の相当量が冷凍在庫になった模様である。

2017年のシーズン開始時の過大な冷凍在庫は、相場復調の足枷となり、9月下旬の浜値は海面物800gサイズ2,500円/kg、キロUP 2,700~2,800円/kg、陸上物1.5キロUP3,200~3,300円/kgで、2016年同期比で約17%の下落となった。

最盛期を控えた11月末には、海面物1,500~1,800円/kg、陸上物2,000~2,200円/kgまで下落し、12月末には海面物1,300~1,700円/kgと投げ売りに近い状況になり、陸上物も1,800~2,200円/kgまで下落して、年内出荷を終了した。

2018年の年明け後には、量販店が値頃感の出たトラフグの刺身セットを目玉商品としたり、通販大手が長崎県の産地とコラボして、お刺身・ちり鍋限定セットを販売した。しかし、2年前の訪日外国人による爆食のような大量消費に結び付く事はなかった。

2月に入っても荷動きが悪く、水産卸売市場が入荷調整を始めた結果、主要産地の長崎県でも10日に一度程度の出荷となったため、約70万尾もの大量在庫を抱えることになった。

3月に入ると海面物相場は、中国産冷凍物に足を引

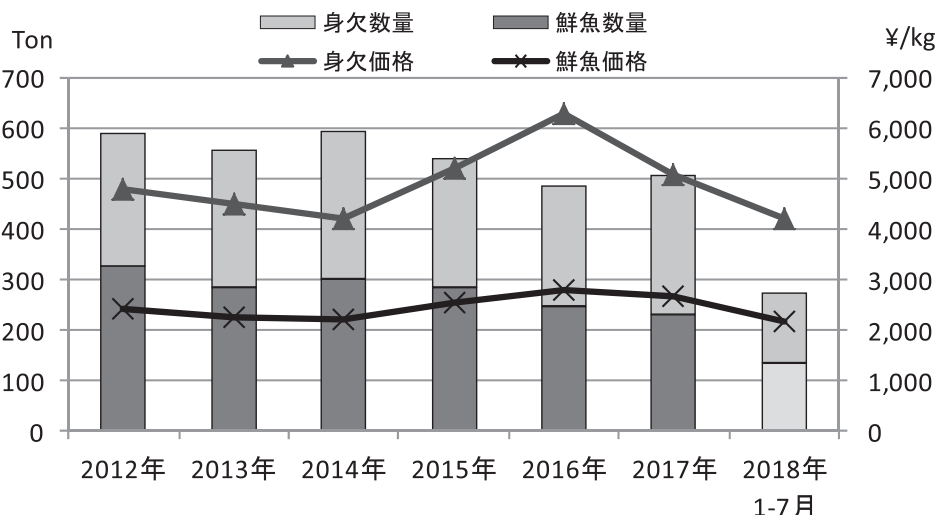
張られ、浜値 800~1,100円/kgと史上最低価格も出始めた。そのため、一部の養殖業者は養殖期間を1年延長し、3年魚での出荷の検討を始めた。加工場を持つ養殖業者は、活魚出荷を停止し、身欠き冷凍加工を優先するようになった。天然物相場も養殖物の影響を受けたようである。愛知県での漁獲量は38.3tで前年比114%と増加し、平均価格は4,800円/kgと前年比87%に下落、2月の白子入りでさえ5,000円/kgを超えることはなく、シーズン最終水揚げでは2,463円/kgと、平成に入り最低価格で終了した模様である。

今シーズンも中国産は、活魚や冷凍物(エラ・ハラ抜き)でかなり輸入されたようである。しかしながら、国産の安値で中国産の売価が輸入価格を下回った(逆ザヤ)との情報もあり、国産物冷凍在庫と共に相場上昇の足枷になった模様である。

生育面では、前年のような長崎北部での赤潮(カレンニア・ミキモトイ)による25万尾の大量斃死といった報告は入っていないが、春先から赤潮が長引き、海面養殖場だけでなく陸上養殖場でも若干の斃死はあったようである。

図2は、東京都中央卸売市場(全市場)におけるトラフグ(鮮魚)と身欠きの取扱数量と年平均価格(消費税込)を示したものである。取扱数量は、鮮魚が減少傾向で、身欠きは増加傾向である。価格は鮮魚と身欠きともに下落傾向である。

図2 東京都中央卸売市場 トラフグ(鮮魚)と身欠き取扱数量と価格



資料:東京都中央卸売市場(全場) / 鮮魚/ふぐ類/とらふぐ 天然と養殖の区別なし / 同上 / 鮮魚/ふぐ類/みがきふぐ

3. ヒラメ 平目

2018年1月～7月の東京中央卸売市場相場は、2,700～1,900円/kgと、前年同月を約10%上回る価格で推移した。一方で出荷量は、前年比87～97%と、各月前年割れの荷動きで推移した。韓国からの輸入ヒラメ相場も上げ基調であったことやクドア懸念もあり、2017年9月～2018年8月まで各月とも前年を下回る輸入量で低調推移した。

なお、大分県の養殖場では、ろ過装置の導入や低密度飼育が実践されている関係もあり、スクーチカ症、エドワジェラ・タルダ症等による斃死も減少傾向にある。

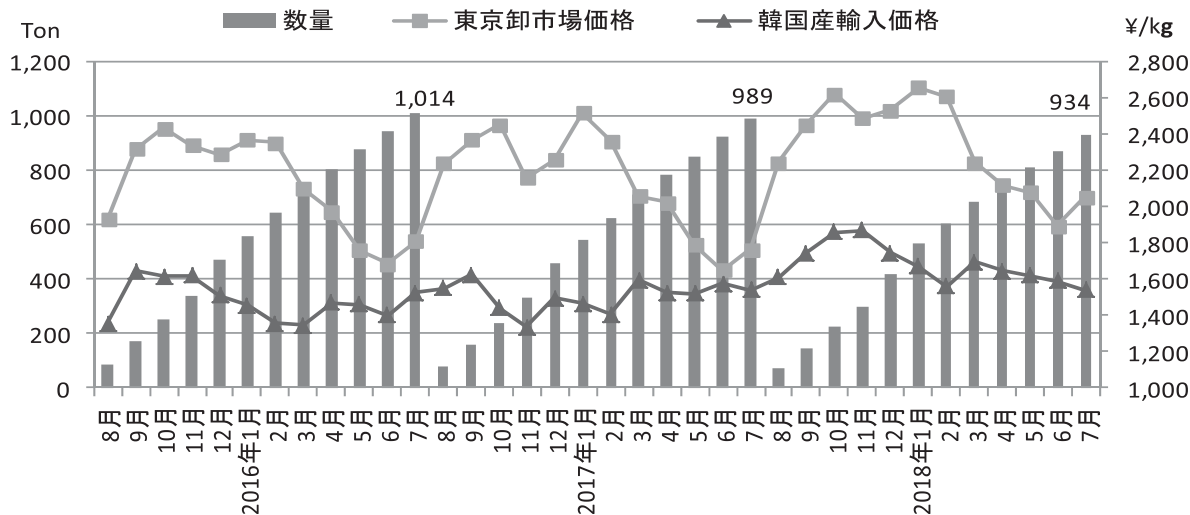
向にある。

懸案事項である成魚のクドア問題に関しては特に大きな問題は発生しておらず、今後、価格、荷動き共に堅調推移が予想される。

なお、厚生労働省食中毒統計資料によれば、クドア食中毒の発生件数と患者数は、2018年(1～8月)3件・15人、2017年12件・126人、2016年・22件・259人となっている。

図3は、直近3年間の東京都中央卸売市場(全市場)の取扱数量と価格、及び韓国産輸入の価格の推移を示

図3 東京都卸売市場 活ヒラメ取扱数量と価格及び韓国産輸入価格



資料:東京都中央卸売市場月報 財務省 貿易統計 活魚類/活ひらめ/天然養殖の区分なし

したものである。2017年8月～2018年7月の年間取扱量は934トンであり、前年同期は989トン、前々年は1,014トンで、僅かながら2年連続減少しているが、価格は堅調に推移している。数量と価格（消費税込）

は天然物と養殖物(国産+韓国産)を合算している。韓国産はCIF価格（商品代+運賃+保険、消費税抜き）である。

4. ブリ・ハマチ 鮠・鮠 鮠・鮠 鮠・鮠 鮠・鮠 鮠・鮠 鮠・鮠 鮠・鮠 鮠・鮠

2018年のモジャコ採捕状況は、長崎県、徳島県など一部の地域では低調であったものの、概ね採捕状況は順調であった。採捕されたモジャコの大きさは3～5g/尾が中心であり、各地のモジャコ導入尾数は、歩留りも良好であったことから、2017年よりも10%増の2,000万尾を越えているものと考えられる。

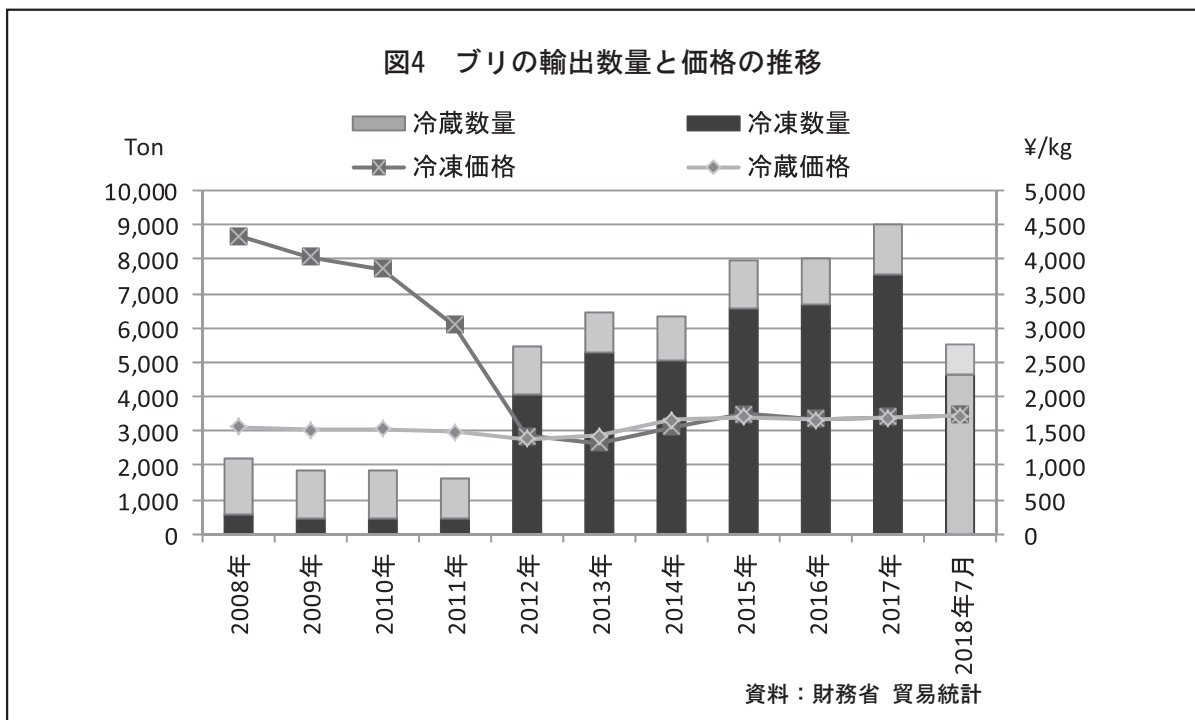
2018年の生育状況は、例年よりも暑い夏であり、水温も30℃近くまで上昇したものの、高水温で給餌が出来なかったと言う話はなかった。赤潮関連としては、主産地の1つである東町では、赤潮発生時期に漁協による餌止め指導が徹底されており、斃死被害は出ていない。大分方面では、8月中旬よりシャットネラが発生したことで、一部の当歳魚で被害が出ており、愛媛でもカレニアミキモトイが6月～7月に発生し、給餌が出来ない状況が続く、赤潮が目立つ夏であったと言える。

2017年の浜値は、夏の売れ行きが好調で900円/kgまで上昇するが、天然物の水揚げにともなって、年末には800円/kg、2018年4月には780円/kgまで下がった。ただ在池尾数が少なかったことで、5月には800円/kgを回復し、7月には870～880円/kgとなる。2018年の夏場も売れ行きも良く、秋以降に出荷予定の魚も集めないといけない状態であり、養殖物の品薄感

は当分続きそうである。

2017年に海外輸出されたブリ冷凍及び冷蔵生鮮フィレの合計数量は8,990トンに達し、過去最高であった（図4）。2018年も輸出は好調で、1月～7月の数量は前年同期比で1%増の5,534トン、金額は3%増の96億円となっている。主力の冷凍フィレは、アメリカで減少し、中国、東南アジア、EU域内で増加して前年並みだが、生鮮フィレは数量、金額ともに前年同期比10%以上増加している。因みに、生鮮フィレの2012年以降の年間輸出量は1,200～1,400トンであったが、本年は7月末で905トンとなっており、年末に向けてさらなる伸長が期待される。また、日本・EU経済連携協定（EPA）大枠合意により、冷凍ブリフィレの関税15%の撤廃が、2019年春頃には実施されそうであり、輸出量の記録更新が期待される。

図5は、東京都中央卸売市場（全市場）における養殖ハマチ鮮魚の取扱い累計数量と月別価格(消費税込)について、直近データの2018年7月を基準に、3年分を示したものである。2017年8月～2018年7月の年間取扱量は5,999トンであり、前年同期7,254トン、前々年は8,046トンと、2年連続減少している。価格は上昇傾向である。



し、4月に入り各産地からも順調に数量が増加し、6月まで前年よりも増加している。今シーズンは、早期の人工種苗の成育も良く、出荷当初から順調な立ち上がりであった。琵琶湖種苗についても、昨シーズンとは打って変わり早期採捕が進み、3月から魚体重10g前後の子鮎中心に順調に出荷された模様であった。

今年は、各地の豪雨被害や、梅雨明け後の猛暑で観光産業への影響が懸念された。アユ関連では、豪雨で一時中断した鵜飼の再開のニュースもあり、夏休みに入って活魚出荷も順調な様子であった。

東京中央卸売市場の生鮮アユの価格は、出荷量は増加したが、4月は1,700円/kg台、5月、6月は1,500円/kg台と、昨年より約100円/kg 安値で推移した。

人工種苗や琵琶湖種苗の生産は順調であったが、成品の販売価格は昨年より下落傾向で、ここ数年の人件費や飼料コスト上昇で、各生産者にとっては採算的に厳しい状況が続いている。今後も、疾病対策など歩留まり向上に努めることはもちろん、消費面でも、バーベキューや調理メニューの提案などアピールが継続されることで、来期は、アユ認知度のさらなる高まりと魚価アップに期待したい。



新人紹介 NEW FACE

株式会社ユーエスシー 営業第3部

株式会社ユーエスシーの菅原拓也と申します。弊社には、営業1部(自動車関連部門：石油・化学製品・純正機能部品等)、営業2部(食品部門：食用油等)、営業3部(水産部門：ブラインシュリンプ等)があり、それぞれの商品を直営ネットワークでお客様に販売しております。私は、営業3部に所属し、ACNには今年から入会させて頂きました。

学生時代は理学部にて大型藻類の生理生態について研究しておりました。その後、漁協職員などを経て、現職に就き、今年で4年目になります。当初は専門的な用語、知識が多く、お客様からいろいろと教えて頂くことばかりでした。最近になって、ようやく種苗生産の世界が見えてきたかどうかというところです。今後はACNの皆様と勉強会などを通じて知識を深め、水産業界の皆様にご貢献できるようになりたいと考えております。今後とも、宜しくお願い申し上げます。



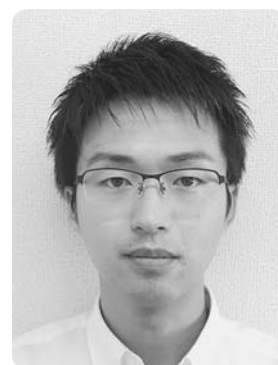
すが わら たく や
菅原 拓也

太平洋貿易株式会社 第一営業部(国内営業)

2018年1月に太平洋貿易株式会社へ入社しました奥出英明と申します。第一営業部(国内営業)に所属しています。岡山県倉敷市出身の32歳、趣味は旅行と写真、最近ではゴルフを始めました。

前職までは物流の業務に従事してきました。宅配から長尺物輸送に携わり、事務職から営業職まで幅広い職種を経験してきました。水産業界は全くの未経験ですが、日々の業務や9月より受講する長崎大学水産学部の海洋サイバネティクス・プログラムを通じて意欲的に知識を吸収したいと思っております。

一日でも早く皆様のお役に立てるよう努力して参りますので、どうぞ宜しくお願いいたします。



おく で ひで あき
奥田 英明

太平洋貿易株式会社 第一営業部(国内営業)

2018年1月に太平洋貿易株式会社へ入社しました矢津田本気と申します。福岡市出身、26歳です。まだ担当顧客はありませんが、第一営業部(国内営業)に所属しております。

学生時代は経済学部所属し、学業の傍らアルバイトに明け暮れ、前職では工業用バルブの営業をしておりました。水産業界は全くの未経験で、現在は上司に同行し、様々な顧客を回りながら知識を深めております。そこで初めて見聞することも多く、毎回大きな刺激を受けております。まだ右も左も分からない状態ですが、少しずつ知識を習得し、水産業界へ貢献していきたいと思っておりますので、今後とも宜しくお願い致します。



やつだ もと き
矢津田 本気

ACN [海外レポート] REPORT

日本の錦ゴイ

～ 中国・南京に開かれた輸入門戸 ～

九州・水生生物研究所 稲田善和

錦ゴイって？

「錦ゴイって、いつどこで生まれた？」と聞かれても、答えられる人は少ないでしょう。おそらく日本人でも多くの人が知りません。錦ゴイは、江戸中期、越後の国、現在の新潟県山古志地方が発祥の地です。当時の村人は、海が遠いこともあって、貴重なタンパク源として、池や田んぼで食用ゴイを生産していました。その生産の中で、ちょっと色変わったコイが生まれ、村人が競って変わりもののコイを作り、自慢し合ったのが始まりと云われています。そして、江戸後期には、より美しいコイを作るという熱意と、長年にわたる交配と選抜という努力の結果、白地に赤の紅白のコイを作り上げました。その後、大正時代には、紅白に黒を加えた三色が生まれ、以来、錦ゴイは生産者のたゆまぬ努力によって、様々な色合いを持つ、数多くの品種が作られるようになりました。このように、錦ゴイは日本原産の観賞魚と云えますし、業界では「日本の国魚」とも呼ばれています。

錦ゴイの養殖・海外輸出

錦ゴイの養殖業は、昭和の経済成長を背景に急速に発展します。一戸建ての家に庭池を造り、錦ゴイを飼うのが一つのステータスとも云われました。しかし、オイルショック以降の経済成長の鈍化は錦ゴイ業界にも徐々に影響し、気に入ったコイの購入や品評会出展などで、この産業を支えてきた全国の愛好家人口も減少し続けることとなりました。

そのように業界が不振に向かう中、昭和の後期に、一つの活路が見いだされます。錦ゴイの輸出です。ヨーロッパ市場へ先鞭を付けたのは神畑養魚(株)の神畑重三会長(故人)と云われています。それに続いたのは福岡の(株)尾形養鯉場の尾形学社長でした。現地の展示会で、錦ゴイを初めて見たヨーロッパの人々は、その余りの美しさに目を丸くして驚いたそうで、

ドイツやイギリスでは錦ゴイブームが起きたとさえ云われました。以後、輸出相手国は世界中に拡がり、日本の主要な業者さん達もこぞって参入し、今や一大輸出産業となっています。おそらく、日本産の活きた魚で、輸出額のトップは錦ゴイではないかと思われる。

中国への輸出・禁止から再開へ

中国も輸出の相手国でした。しかし、中国は公式には日本の錦ゴイの輸入を認めておらず、国際空港での検疫制度もありませんでした。そのため、今現在の中国国内の錦ゴイは、殆どが香港経由で輸入されたものです。しかし、その輸入も、世界的なコイヘルペスウイルス(KHV)病のアウトブレイクで、滞りがちとなりました。中国政府は、日本でのKHV病の発生を理由に、平成15(2003)年に輸入を禁止しました(ただし、香港での輸入は継続されます)。

輸入の問題があるとはいえ、ここ数年来、中国では経済成長が続く中、錦ゴイへの関心も急速に高まり、日本から輸入された錦ゴイでの品評会が全国各地で開かれるようになっていきます。また、日本産観賞魚からの現地生産も徐々に増えつつあります。

平成25(2013)年12月、日中政府間で錦ゴイの輸出に関する協議が始められました。日本でのKHV病の防疫対策が功を奏した点と、日中両国の業界の要望もあってのことです。その合意に基づき、日本側から輸出を希望する養殖場のリストが中国側へ送られます。そして、平成27(2015)年6月に中国から4名の規制担当官を招聘し、新潟・岡山・広島・福岡の4県内10カ所の養殖場と、新潟県の内水面水産試験場、および公益社団法人水産資源保護協会(魚病検査機関として)の視察が行われました。その視察結果を受けて、中国政府は日本の6業者を選定し、輸入業者として登録しました。ちなみに有効期間は平成28(2016)年4月～31(2019)年3月の3カ年です。

中国の輸入門戸として、先ず上海と寧波の民間飼

育施設が公認されました。日本の係官も現地を視察したとのことです。しかし、急拵えの点もあってか、平成29（2017）年の時点では、試験的な輸送（輸入）に留まっていました。

福岡県から江蘇省へ錦ゴイを贈呈

そのような状況の中、平成28（2016）年に、福岡県から中国江蘇省へ錦ゴイを贈呈しようという話が持ち上がりました。翌29（2017）年が福岡県と江蘇省の姉妹県省締結25周年に当たり、それを記念にという主旨からです。発案者は福岡県日中友好協会の中村誠治副会長（県議）で、平成29（2017）年1月に、中村副会長を団長とした訪問団4名が江蘇省の省都南京市を訪れました。団員は、錦ゴイ寄贈者の（株）尾形養鯉場の尾形社長、旅行社FJC商事（株）の西尾武文社長（福岡市日中友好協会顧問・通訳）と技術アドバイザーの私（稲田）です。到着翌日には早速、省の人民代表大会の常務委員会・外事委員会と省政府の担当との第一回の協議が行われました。



江蘇省の概要と政治・行政のしくみ

ここで、中国江蘇省の概要と政治・行政について、説明しておきましょう。

江蘇省は、中国大陸沿岸部の中央部、揚子（長）江の下流域にあります。東側は東シナ海に面し、西部は安徽省、南部は上海市と浙江省、北部は山東省に隣接しています。内陸部には河川湖沼が多く、亜熱帯から温帯の気候です。人口は8,029万人、省とは云え、ドイツ（8,068万人）とほぼ同じです。一人当たりのGDPと外資利用額は中国1位、国民総生産、輸出入総額と財政収入は2位と、経済的にも豊かな省と云えます。水産業も歴史が古く、内水面・海面ともに今も盛んに行われています。

政治的には、省の最高意志決定は省人民代表大会（略称：省人大）にあります。省人大の代表は、省内の行政区単位の人民代表大会の代表の中から、投票によって801名が選出されます。任期は5年で、代表大会は年に1回招集されます。代表大会が閉会中は、代表の中から選出された65名による常務委員会が職務を代行します。この常務委員会には更に各種委員

会があり、対外的な仕事は外事委員会が担当します。

行政は、省人大の決定と権限の下、人民政府の各種行政組織が行います。日常的には省人大の常務委員会とその各委員会の監督・指導の下に行われていると云ってもよいでしょう。

なお、省長（日本の知事に当たる）は省人大で選出されますが、行政関係とは別組織の中国共産党・省委委員会の副書記が当てられるようです。

錦ゴイ贈呈の経過

第一回目の協議は、福岡訪問団4名と外事委員会の藤勇主任（トップ）、郭敏文委員、行政から外事委員会弁公室の徐亜軍主任、張宏副主任（通訳）、省出入国検疫検験局動物管理処の銭科副処長や海洋漁業局の職員らの間で行われました。このメンバーの他に、日本では考えられないことですが、省内の錦ゴイ業者の林凱社長も出席を認められました。林社長は、祖母上が日本人で、日本の大学を卒業後、商社に勤務した経験もあり、日本の錦ゴイ業者とも繋がりのある省内の若手実力者です。

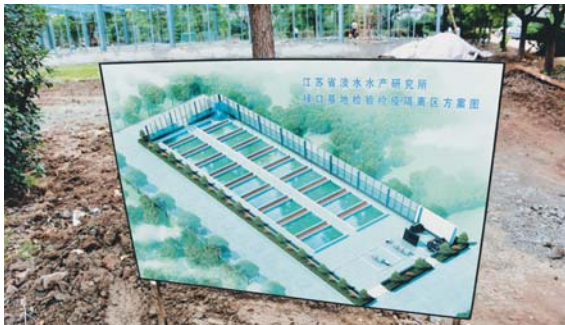
ところが、協議は1点で行き詰まります。「検疫のための隔離施設をどこに誰が造るか？」の方向が決まりません。制度上、建設と運営は行政ではできないのです。そこで林社長の発言「空港の近くに系列の養鯉場がある。そこに、検疫局の指導で隔離場を造ってもよい」が協議を一気に進展させました。協議の翌日には、かつての福岡県水産研修生二人と再会しました。彼らは今や海洋漁業局の幹部職員となっています。その後、贈呈コイの飼育候補池として、南京市内の玄武湖公園や牛首山仏教文化園の數池を視察して回りました。

この第一回協議について、詳しくは九州・水生生物研究所の下記Blogをご覧ください。

<https://kyushu-lab.at.webry.info>

第二回目の協議は、平成29（2017）年8月に行われました。隔離施設は、その後の海洋漁業局の意向で、省淡水水産研究所の禄口実験基地の敷地内に造ることに変更されていました。訪問団は、南京空港近くの実験基地を訪れ、建設中の隔離施設を視察し、錦ゴイの贈呈や施設の開所時期などについて、郭委員はじめ淡水水産研究所の潘建林所長、ほか省や市の関係部局の責任者らと協議しました。また、贈呈錦ゴイの飼育地も、第一候補であった南京市内の玄武湖公園から揚州市内へと変更されており、その候補池を視察してほしいとのことで、国定公園「个園」内の最良の一池を推薦しました。

江蘇省の隔離施設や飼育池も決まったところで、10月には、郭委員はじめ淡水水産研究所の潘所長や韓飛課長らが福岡に来て、尾形養鯉場や福岡県の内水面研究所を視察しました。



第三回目は、完成した隔離施設での「錦ゴイ贈呈式展」に参加するための訪問です。平成29（2017）年の暮れも押し迫った12月29日でした。贈呈用のコイ（220尾）は事前の11月27日に空輸されています。



式典には、福岡からは福岡県日中友好協会の松本龍会長（元衆院議員、故人）ほか13名が出席し、江蘇省からは省人大常務委員会の史和平常務副主任と趙鵬副主任（主任欠員のため実質No.1と2）ほか省・南京市の関係者、錦ゴイ業者らが参集しました。この式典によって、名実共に南京に錦ゴイの輸入門戸が開かれたこととなります。



錦ゴイ贈呈に関わって感じた事

私は、水産技術のアドバイザーとして、この福岡県から中国江蘇省への錦ゴイ贈呈という出来事に関わりましたが、いくつかの貴重な見聞をすることができました。

その一つは、江蘇省側（中国側と云っても良いでしょう）の意志決定の迅速さです。第一回目1月の協議では、外事委員会の郭議長の下で、福岡側の要望も入れて、「今年の上半期に国の検査検疫局の隔離施設建設の認可を得る。下半期には錦ゴイの贈呈を実現する。」という事が取り決められました。3月に全国人民代表大会があったこともあり、国家検査検疫局の認可が大分遅れましたが、7月には隔離施設の建設が始まり、11月上旬には完成し、日本から錦ゴイが空輸され、12月末には贈呈式典が行われました（尤も、当初の式典予定日は、福岡側の要望で、姉妹県省締結月の11月でしたが、それには間に合いませんでした）。

協議中の様子を見ていると、省人大の外事委員会と行政の各部門の責任者が活発に意見を述べ合います。遠慮して意見を控える空気はありません。そして、決定した事は即実行するという方式となっています。

また、決定事項に何か問題・課題があれば、変更も速やかという面もあります。隔離施設の建設は、当初の「民間で場所も費用も」から「海洋漁業局が淡水水産研究所の敷地内に」へと変更され、錦ゴイの飼育池も、玄武湖公園では濾過施設が設置不可のため、揚州の国定公園へと変更されました。また、隔離施設の運営も淡水水産研究所と錦ゴイ2業者による共同ということになりました。

このように、日本の政治・行政機構の決定手続きとは、「時間的にも計画変更という面でも、大きな隔たりがあるなあ」と感じざるを得ませんでした。

二つには、省人大の政策に基づいた常任委員会と行政による錦ゴイ産業の育成策です。それは「日中錦ゴイ文化交流園」の造園構想にも表れています。そして、平成29(2017)年4月には、これまでであった金魚を含む官運営の「観賞魚部会」を改め、市場経済を取り入れた業界運営主体の「観賞魚連合会」が組織され、同時に、これを技術的・学術的にサポートする海洋漁業局傘下の「観賞魚産業連盟」も組織されました。尾形社長は、早速、これらの会・連盟の会議に講師として招聘されています。このように官民一体となった振興策が着々とスピーディに進んでいるのです。今後は組織化された業界によって、日本からの直輸入も飛躍的に伸び、省内でも、粗悪品のない質・量共に優れた錦ゴイが供給されていくことでしょう。

三つには、前述したように、江蘇省内で、錦ゴイを含めて、観賞魚業界の再編と発展が計られています。その背景には、中国経済の成長があることは明らかです。私はこれまで「経済発展中心の中国に、錦ゴイの需要は本当にあるのか？」とっていました。そこで訪問初日に早速、業者の林社長に「中国では、錦ゴイを誰が買うのですか？公園やホテルなどですか？」と聞いてみたところ、返答は「一戸建ての家や別荘で池を持つ人達です。高級マンションの水槽で飼う人達も居ます。」でした。いわば富裕層の人々でしょうが、人口約8,000万人の江蘇省でも、例えばその1割だとしても、800万人の富裕層が居ることになります。中国全体となると正に巨大市場と云うほかはありません。

今後の中国経済がどのような方向へ進むのか？門外漢の私には分かりませんが、今現在、中国政府が認める隔離施設は増加しつつありますし、登録される日本の養殖場も追加されつつあります。日本原産の錦ゴイが、観賞魚として、中国で増えて、定着していくのは確かでしょう。

四つには、中国の巨大な市場を対象に、江蘇省の官民の関係者も、日本の生産者と連携し、錦ゴイの産業化をいかに進めていくかを考えています。日本の生産者も将来を見据えた戦略が必要でしょう。今後の中国では、日本から輸入される錦ゴイと、国内で生産されるものが併存する形となります。

これから中国への輸出が増えるに伴い、日本から錦ゴイ生産のノウハウが流出するのでは？と心配する向きもあります。また、産地としての中国が登場し、世界で日本と競合したり、日本に逆輸入するのでは？と懸念する声もあります。

確かに今や、日中の養殖技術自体にそう差があるとは思えません。むしろ、技術革新が久しく滞った日本より、更に進んでいる感さえあります。とは云え、日本の錦ゴイの美を創り出した稚魚の選別技術は、正に“巧の技”で、一朝一夕に習得できるものではないことも確かです。この伝統的な独自の技で、中国市場において、“日本産錦ゴイ”をブランド化できるかどうか、シェア確保のキーポイントになってくるのではないのでしょうか？中国で生産される錦ゴイは、日本産とは少し違って、国民の美的感覚を反映した“中国風日本的錦鯉”になっていくように思われます。

産地競合や逆輸入については、錦ゴイは美術品と同じで、その美しさ（色の質と模様・姿形）で価格が決まりますし、同じコイはいませんので、競合には馴染みません。また、食用魚のように、価格が安いから逆輸入されるということも考え難いことです。

おわりに

錦ゴイ養殖は、輸出に活路を開いた産業として、珍しい事例です。これは、ドイツ・イギリス・アメリカなど経済的な先進国や、それに続く、中国やインドネシア、マレーシアなどの新興国に需要があり、それを開拓した業者・業界があったからに他なりません。そして、近年の輸出先は先進国から経済が好成長の新興国へとシフトしつつあります。いわば、輸出先は、経済成長が鈍化(停滞)した先進国より、顕著な成長を示す新興国が主体ということになります。

以下は私見ですが、日本も経済的先進国ではあるものの、アメリカに続いて、もはや大巾な経済成長が望めない国です。このような低成長の老化経済域（用語が不適切かも知れません）に達した国で、かつ少子高齢化が進んだ国で、国内消費が伸びないのは当然の成り行きと云えましょう。

錦ゴイは、観賞魚＝愛好品で、経済状況を即反映し易く、食用魚とは違う面もありますが、日本の食用魚の養殖生産も、老化経済下、少子高齢化の国内で、かつ先進国と新興国が混在する世界で、いかにあるべきか？どう活路を開くべきか？を真剣に考える必要があるのではないのでしょうか？！

【参考資料】

- ・「泳ぐ宝石 錦鯉」尾形学著、2011年4月10日、新日本教育図書(株)発行
- ・「新潟の「巧の技」を中国で継承」月刊錦鯉、2017年3月号 (No.358)、(株)錦彩出版
- ・「南京国際空港近郊に政府公認の『錦鯉輸入基地・隔離施設』誕生」月刊錦鯉 2018年1月号(No.368)、(株)錦彩出版
- ・農林水産省各Web資料